

自閉症・情緒障害特別支援学級における自立活動の授業づくりの研究

四万十市立八束小学校 教諭 松下由美子
高知県教育センター 指導主事 和田 具子

自立活動の授業においては、個々の児童生徒の課題に即して指導目標を設定し具体的な内容を工夫して指導することが必要である。しかし、小・中学校では、今まで通常学級の担任であった教員が特別支援学級の担任となるため、児童生徒の障害や特性を踏まえた実態把握の視点について十分理解されていない。その結果、個々の課題に応じた自立活動の指導が行われていないといった実態が見られる。

そこで、本研究では、自閉症・情緒障害特別支援学級の担任に、自立活動の授業づくりの手順や方法を示すことで、児童の課題に即した指導が可能となり、担任の授業が変容することで児童の実態も改善されると考えた。これらの取組を検証した結果、担任の自立活動の授業が充実し効果が認められた。

キーワード：自閉症・情緒障害特別支援学級、特別支援学級、自立活動、指導計画、学習指導案

1 研究目的

近年、全国的にも高知県においても、特別支援学級に在籍する児童生徒が増えている。中でも、自閉症・情緒障害特別支援学級の在籍児童生徒数が他の障害種に比べ年々増加している現状がある。平成21年2月に、文部科学省は、この在籍者数などの実態を踏まえ、「情緒障害特別支援学級」の名称を「自閉症・情緒障害特別支援学級」に変更した。自閉症又はそれに類する障害と、かん黙、不登校などの心理的な要因による情緒障害とは、障害の原因が異なることから、両者に対する指導内容や配慮事項が異なることを十分に認識しておく必要がある。

自閉症・情緒障害特別支援学級では、小学校及び中学校の学習指導要領解説の総則編に示された特別支援学校の教育課程を理解したうえで、さらに、基本的な生活習慣の確立を図ること、適切に意思の交換を図ること、円滑な対人関係を築く方法を獲得すること、目標をもって学習に取り組むこと、不登校等による学習上の空白を埋め基礎的・基本的な学力を身に付けることなどを、個々の児童生徒によって指導目標や指導内容・方法が異なってくることを十分理解した上で指導しなければならない。

知的に遅れのない児童生徒が入級していることから、学年相当の学力を保障しつつ、自立活動の指導では、児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことが望まれている。しかし、小・中学校では、通常学級の担任が特別支援学級の担任となるため、障害の理解や特性に応じた実態把握、児童生徒の課題の見取りが弱い。そのため、自立活動の授業で個々の課題に応じた指導が難しいという実態がある。

そこで、本研究は、自閉症・情緒障害特別支援学級の担任に、自立活動の授業づくりの手順や具体的な方法を示すことで、自立活動の授業が充実するのではないかと考え、検証授業から担任と児童の変容を観察し検証した。

2 研究仮説

自閉症・情緒障害特別支援学級の担任が、自立活動の授業づくりの手順や児童生徒の実態把握の仕方を理解し、教材教具を活用することで、自立活動の授業が充実していくのではないかと考える。

3 研究内容

(1) 基礎研究

ア 「情緒障害者」を対象とする特別支援学級の名称について

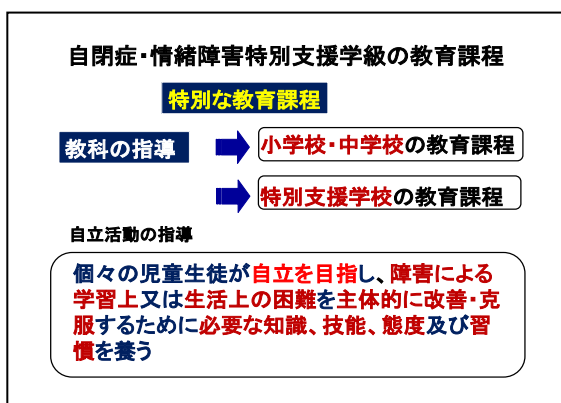
平成 21 年 2 月に、文部科学省は、在籍者数などの実態を踏まえ、「情緒障害特別支援学級」の名称を「自閉症・情緒障害特別支援学級」に変更した。

自閉症又はそれに類する障害と、かん黙、不登校などの心理的な要因による情緒障害とは、障害の原因が異なることから、両者に対する指導内容や配慮事項が異なることを十分に認識しておく必要がある。

イ 自閉症・情緒障害特別支援学級の対象

- 一、自閉症又はそれに類するもので、他人との意思疎通及び対人関係の形成が困難である程度のも
- 二、主として心理的な要因による選択性かん黙等があるもので、社会生活への適応が困難である程度のも

ウ 教育課程の編成



自閉症・情緒障害特別支援学級では、知的に遅れない児童生徒が入級していることから、教科指導においては小中学校の教育課程により学年相当の学力を保障する。さらに、児童生徒の障害や発達に応じて特別支援学校学習指導要領を参考にした教育課程を取り入れ、自立活動の指導の保障をしなければいけない。自立活動の授業の中で、児童生徒の情緒の安定を図り円滑に集団に適応することができるように、多様な状態に応じた指導をする必要がある。

エ 自立活動の指導について

自立活動の指導においては、自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度、習慣を養うことが望まれる。特別支援学校学習指導要領自立活動編の自立活動の「内容」には、六つの区分（1 健康の保持、2 心理的な安定、3 人間関係の形成、4 環境の把握、5 身体の動き、6 コミュニケーション）の下に 26 項目が示されている。小中学校の 9 年間の自立活動の指導の積み重ねは、児童生徒の進学、就職、社会参加や社会適応等将来の自立の力の保障に向けて大きく関わってくる。

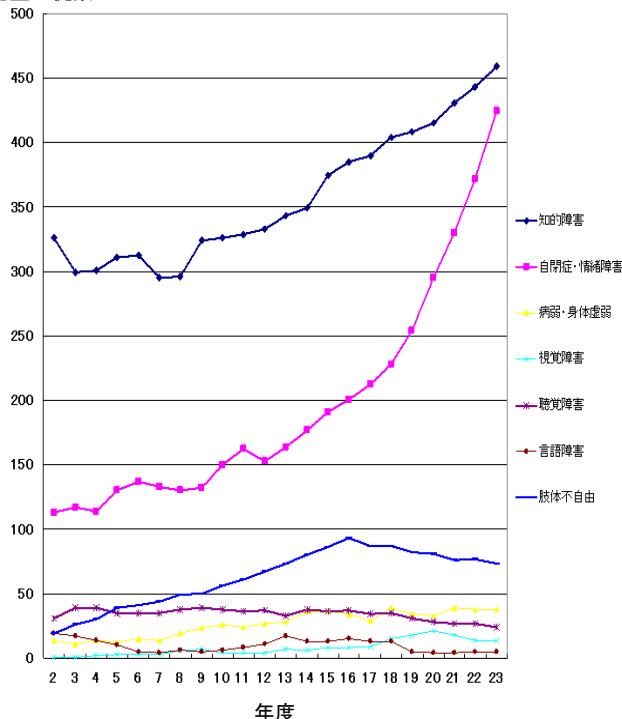
内容	1. 健康の保持	2. 心理的な安定	3. 人間関係の形成	4. 環境の把握	5. 身体の動き	6. コミュニケーション
区分	生命を維持し、適切な健康管理とともに、日常生活を行うために必要な身体の健康状態の維持・改善を図る観点からの内容を示している。	心理的な安定を図り、対人関係を円滑にし、社会参加の基盤を培う観点からの内容を示している。	自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う観点からの内容を示している。	感覚を有効に活用し、空間や時間などの概念を手掛かりとして、周囲の状況を把握したり、環境と自己との関係を理解したりして、的確に判断し、行動できるようにする観点からの内容である。	日常生活や作業に必要な基本的技能を習得し、生活の中で適切な進退の動きができるようにする観点からの内容である。	場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるようにする観点からの内容である。
項目	(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること (2)病気の状態の理解生活管理に関すること。 (3)身体各部の状態の理解養護に関すること。 (4)健康状態の維持・改善に関すること。	(1)情緒の安定に関すること。 (2)状況の理解と変化へ対応に関すること。 (3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	(1)他者とのかわりへの基礎に関すること。 (2)他者の意図や感情の理解に関すること。 (3)自己の理解と行動の調整に関すること。 (4)集団への参加の基礎に関すること。	(1)保有する感覚の活用に関すること。 (2)感覚や認知の特性への対応に関すること。 (3)感覚の補助及び代行手段の活用に関すること (4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。 (5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。	(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること (2)姿勢保持と運動・動作の補助手段の活用に関すること。 (3)日常生活に必要な基本動作に関すること。 (4)身体の移動能力に関すること。 (5)作業の円滑な遂行に関すること。	(1)コミュニケーションの基礎的能力に関すること。 (2)言語の受容と表出に関すること。 (3)言語の形成と活用に関すること。 (4)コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。 (5)状況に応じたコミュニケーションに関すること。

オ 自閉症・情緒障害特別支援学級における現状と課題

全国的に自閉症・情緒障害特別支援学級の対象の児童生徒が増えている傾向が見られ、障害の特性に応じた指導が一層求められるようになってきている。高知県においても、自閉症・情緒障害特別支援学級の児童生徒数や学級数が増えているのが現状である。

高知県

児童生徒数



グラフ1 高知県 特別支援学級児童生徒数

小中学校の現場では、通常学級の担任が特別支援学級の担任となるため、児童生徒の障害や特性を踏まえた実態把握の仕方、課題の見取り方や支援方法において視点が異なり指導に困っている。

自立活動では、一人一人の課題に応じた授業を設定しなければいけないが、教科書や指導書といったモデルや参考にできるものがなく、自立活動の授業のイメージが持ちにくいことから、授業を設定しにくいといった実態が見られる。

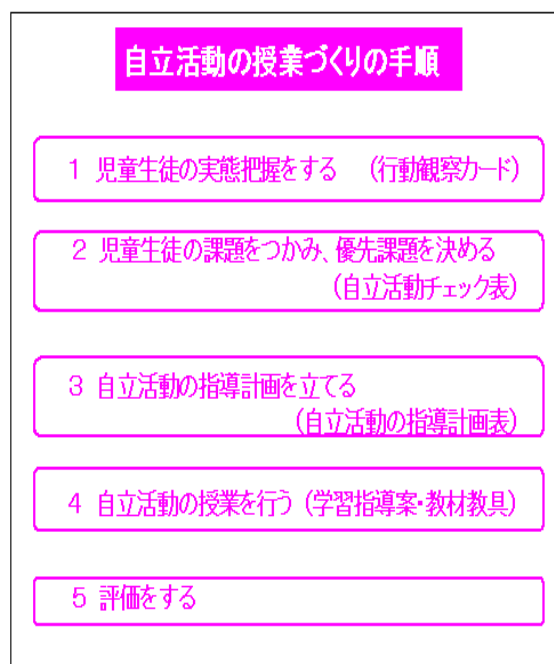
さらに、児童生徒の課題をつかみにくいことから自立活動の指導が難しいという実態がある。このことから学校現場では、自立活動の時間を取らず、教科指導に当てていたり、通常学級で終日を過ごしていたりする。また、教育課程に違いがあるにもかかわらず、知的障害特別支援学級で、同じ指導を受けているということが見られる。

(2) 実践研究

担任が、自立活動を理解し、自立活動の授業の実施ができる支援として、**表1自立活動の授業づくりの手順表**と授業づくりの手順に沿って活用する行動観察カード・自立活動チェック表・自立活動の指導計画表・学習指導案と教材教具・授業評価票のツールを作成した。

まず、児童生徒の実態把握から、課題を見取り優先課題を決める。次に、自立活動の指導計画を立て教材教具を作成し授業を行う。最後に、ふり返り指導を見直す。そうすることで児童生徒の障害の状態や課題に応じた自立活動の授業の実践ができるのではないかと考える。

表1 自立活動の授業づくりの手順表



ア 行動観察カード

表2 行動観察カードは、行動の何を見て記録するのか記録の視点を5つの項目に示している。いつ、場や周囲の状況、児童生徒の気になる行動、どのような対応をしたか、児童生徒の反応と、気になる行動がどのような環境や条件の時に見られて、どのような対応が効果的であるのか。行動の結果を見ることで支援方法を探ることができる。

通常学級では児童生徒のサインを見逃さない行動観察がなされ、適した指導がされている。一方、特別支援学級では、児童生徒の実態が個々に違うために、課題となる行動に対してどんな支援方法が有効であるのかを見取る行動観察が必要となってくる。この観察が児童生徒の実態や行動、障害の特性を理解した視点につながる。できるだけ具体的に記入し、記録を重ねることで分析ができ、行動からの背景が見えてくる。背景から児童生徒の課題をつかんでいく。

表2 行動観察カード

いつ (期定中・休み期間等)	場や周囲の状況 (具体的に)	児童生徒の気になる行動	児童生徒の気になったか どのような対応をしたか(具体的に)	児童生徒の反応
月 日				

イ 自立活動チェック表

特別な教育課程により、特別支援学校学習指導要領自立活動編に示されている、自立活動の「内容」六区分26項目を**表3 自立活動のチェック表**として作成した。

自立活動の「内容」を知ることで児童生徒の課題をおさえ、自立活動のねらいにつながるのではないかと考える。また、授業者にとって授業の設定基準となる。児童生徒の課題をつかみ、チェック表により優先順位を決める。

表3 自立活動チェック表

区分	項目	学年・氏名 () ◎特に必要 ○必要	✓
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。		
	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。		
	(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。		
	(4) 健康状態の維持・改善に関すること。		
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること。		
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること。		
3 人間関係の形成	(1) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。		
	(2) 他者とのかかわりの基礎に関すること。		
	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること。		
	(4) 集団への参加の基礎に関すること。		
4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関すること。		
	(2) 感覚や認知の特性への対応に関すること。		
	(3) 感覚の補助法と移行手段の活用に関すること。		
	(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。		
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。		
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。		
	(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。		
	(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。		
	(4) 身体の移動能力に関すること。		
	(5) 作業に必要な動作と円滑な進行に関すること。		
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。		
	(2) 言語の受容と表出に関すること。		
	(3) 言語の形成と活用に関すること。		
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。		
	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。		

ウ 自立活動の指導計画表

個々の課題がつかめたら、児童生徒に応じた**表4 自立活動の指導計画表**に指導計画を立てる。ねらいに応じて何時間で授業を組み立て、本時の授業はどの段階に位置づけられるのか全体が見渡せるもの(様式)を作成にした。自立活動の「内容」六区分の項目において記述できるようになっているが、全てに記入するのではなく、チェック表により優先課題をつかんでいるので、選定した項目の箇所に記入していく。最終目標を設定して、具体的な指導ができるように計画していくものである。指導結果をふり返り計画を立て直していくようにする。(PDCA)

表4 自立活動の指導計画表

自立活動の指導計画表		学年・氏名		作成日 月 日		
長期目標						
自立活動の区分	児童生徒の実態	短期目標	区分項目	指導内容・指導方法	時数	評価
健康の保持						
心理的な安定						
人間関係の形成						
環境の把握						
身体の動き						
コミュニケーション						
その他						

<担任の検証前の指導>

- 日々の日記のように、つけていた。
(その児童を観るだけ)

行動観察カード

<担任の指導の変容>

- 児童の気になる行動だけでなく、周りの状況や、具体的な対応、児童の反応を継続して記録するようになった。
- 少しずつ、児童の課題や背景が捉えられるようになった。
- 次への手立てや支援が考えられるようになった。

- 自立活動の内容を知らなかった。
- 6区分 26項目も知らなかった。
- チェック表をつけたとき、児童の課題が全部の項目に、当てはまると思い、チェックをつけた。

自立活動チェック表

- 自立活動の内容について区分、項目を知ることができた。
- 優先順位を考えて、チェックすることができた。
- 区分や項目が重なることもあることに、やってみて気づくことができた。

- 自立活動の教科書がないので、算数や、国語の指導計画を立てていた。

自立活動の指導計画

- 児童の課題に応じた自立活動の指導計画を初めて立てた。
- 指導内容や指導方法が明確になった。
- 目標と評価の関係は大切であり、曖昧な目標にすると評価ができないことがわかった。
- 短期目標は児童の課題に応じて少しがんばれば達成できる目標を設定するよう意識するようになった。(次につながるように)

- 教科の指導案とまったく同じものを立てていた。

自立活動の学習指導案・教材教具

- 児童のつまずきを予想して、それに対応できる手立てや支援を用意するようになった。
- つまずかせない手立てや支援についても考えることができるようになってきた。

- 児童は色ぬりが好きなので、ワークシートやプリントに色ぬりコーナーを作っていた。

- 児童の特性に応じたものでなければ、有効ではないことを実感した。

- 通常学級と同じように、この内容をこの時間に指導し、児童に学力を保障していくという学習形態。
- ほとんど口頭による指示で、丁寧ではあるが、説明が長い時は、「話が長い。」と児童に言われてしまい反省した。

自立活動の授業

- 自立活動の時間を保障することが、児童の力につながるようになった。
- 児童が「できた」「わかった」といった達成感を味わうことが、できるような指導内容・方法を考えていけるようになってきた。

ア 行動観察カード

行動を細やかに把握することで児童の課題をつかみ、集団の中で自立活動の指導を計画することにつながった。担任が、通常学級での集団経営の視点から個々の支援の視点へと変容した。

- ・児童の学習や生活場面で、どのような困難を生じているのかを気付くことができるようになった。
- ・具体的な指導をした時に、何ができて、何ができていないのかを見取ることができるようになった。
- ・児童の行動の何を見て、何を記録すればいいのか分かってきた。
- ・児童をほめるタイミングが分かってきた。
- ・つまずきの予想ができるようになった。

【表2 行動観察カード記録例参照】

表2 行動観察カード 記録例

行動観察カード (どのような時、どのような場面でつまずきが見られるか)

いつ (授業中、休み時間)	場や周囲の状況 (具体的)	児童生徒の強くなる行動	どのような対応をしたか(具体的)	児童生徒の反応
11月8日(火) 2校時 国語	・二人で学習している時。	・こちらの反応に対して、とてもおどろき、「ありかとう。」が率直に返る。 ※1校時の自立活動での「あいさつっていいね」で学習したことを意識している。	・「今のことは、先生も嬉しい。優しい気持ちになれたよ。」という。 ※こちらもタイミングが大切だと意識して対応をする。	・嬉しそうで、満足な様子。 ※1校時から2校時とほめられることが多く、積極的。
11月8日(水) 給食の時間	・他の児童はほとんど給食を終えていた。	・昨日より前を半分ほど残した状態で、久しぶりにトイレに行きたいと言った。 ※この日は3校時合宿、4校時合宿、そして、給食という集団での活動が続いていった。	・「どうしても行きたいのなら、いいですよ。」と声をかけて様子を見る。	・すぐにトイレに行く。2分ほどで戻り、給食を食へ始める。 ※少し休んできた様子。(星様き?)
11月10日(木) 音楽祭当日 教室 文化センター	・3年生から6年生は体育館で観望をしている。 ・4年教室で音楽祭に行く準備をしている。 ・音楽祭のため文化センターへ行く。	・爪かみが見られなかった。 ※音程と違う状況なので、不安定になり爪をかむ。指を口に入れる行為が見られるのではないかと、予想していた。	・朝の練習から、音楽祭での爪かみはやり遅り「よかんばつたね。」とほめる。	・嬉しそうにする。 ・歌も音楽も一生懸命にがんばった達成感を感じている様子。
11月11日(金) 1校時 自立活動	・二人で学習していて、「見えないよ」と声をかけた。	・無理といった感じでもせてしまった。 ※爪になる行動が予想できた。	・「これに書いてかみ、見て見えないよ。」と長表ボードを渡す。 ※予想して準備していた。	・すぐに、立ち直り、機嫌に描いていたことを長表ボードに書き出し発表もした。 ※児童に効果的であった。

・どのような場面において児童生徒の強くなる行動が見られるか? ※同時期、同時場所、授業の場面において、前半より後半が得意か否か、行動の強くなる場面から見る。 集団活動の時間が続く、みんなに合わせようとして無理が生じてくる。

イ 自立活動チェック表

特別支援学校学習指導要領自立活動編から自立活動の「内容」を学習し、区分、項目を担当が意識する機会となった。児童の課題がたくさんある場合には、課題を絞り、優先順位を決めて取り組む。

- ・児童にとって、今すぐ取り組まなければならない課題は何か。
- ・児童の発達段階を考え、何を身に付けなければならないのか。
- ・何を指導しなければならないのか。

【表3 自立活動チェック表 記録例 参照】

表3 自立活動チェック表 記録例

学年・氏名 () ◎特に必要 ○必要

区分	項目	1/1
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関する事。	
	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関する事。	
	(3) 身体各部の状態の理解と看護に関する事。	
	(4) 健康状態の維持・改善に関する事。	
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関する事。	○
	(2) 状況の理解と変化への対応に関する事。	
3 人間関係の形成	(3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意図に関する事。	
	(1) 他者とのかかわりの基礎に関する事。	
	(2) 他者の意図や感情の理解に関する事。	
	(3) 自己の理解と行動の調整に関する事。	◎
4 環境の把握	(4) 集団への参加の基礎に関する事。	
	(1) 保有する感覚の活用に関する事。	
	(2) 感覚や認知の特性への対応に関する事。	
	(3) 感覚の補助及び代用手段の活用に関する事。	
	(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関する事。	
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する事。	
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関する事。	
	(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する事。	
	(3) 日常生活に必要な基本動作に関する事。	
	(4) 身体の移動能力に関する事。	
	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関する事。	
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関する事。	
	(2) 言語の受容と表出に関する事。	
	(3) 言語の形成と活用に関する事。	
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関する事。	
	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事。	

ウ 自立活動の指導計画表

自立活動のチェック表に基づいて自立活動の指導計画を立てた。

全体を見通し、児童の課題に沿って授業を計画し、児童の活動が見える目標を立てた。

児童の実態や状態により、区分や項目の関連付けや、時数の計画、授業内容を組み替えるようにした。

【表4 自立活動の指導計画表 記録例 参照】

表4 自立活動の指導計画表 記録例

学年・氏名 4年 日見 作成日 11月 5日

長期目標	短期目標	項目	指導内容 指導方法	時数	評価
苦手なことにも「がんばり強がり」取り組み、できることまで自分で自己有能感をもつ。		1 健康の保持			
・注意されると、不機嫌になり、それが表情や振舞いに表れる。 ・場に応じた声の大きさ、あいさつができない。 ・人の嫌がることを言うことがある。	・意思表示カードを使うことができる。 ・感しのいい話し方をする。	2 心理的な安定 (1) 情緒の安定に関する事。 ○ - (1) ○ - (3)	・意思表示カードを使って練習する。 ・場を設定し、話し方、聞き方の練習をする。	9	・カードを使うことができたか。
・親しい友だちや先生とは積極的にかかわるが、親しい関係ではない人とかかわることが苦手である。	・友だちや先生に「あいさつ」ができる。	3 人間関係の形成 (5) 自己の理解と行動の調整に関する事。			・友だちや先生に「あいさつ」ができたか。
		4 環境の把握			
		5 身体の動き			
		6 コミュニケーション			

実態把握から課題をつかみ、課題に沿って計画を立て、授業への方向性が見えてくる。また、児童の実態に応じて計画を入れ替えたりすることも必要となる。担任が、自立活動の指導計画を立てていく中で、年間を見通した年間指導計画が必要であると気づき、立てることにした。年間指導計画については、年度当初に作成できるように目標、区分（項目）・学習内容等の項目を設け、具体的に記入できる様式を検討中である。

年間指導計画

10月 全6時間	文芸会を楽しもう ● 文芸会って？(1) ● 文芸会の準備をしよう(2) ● 自己紹介を考えよう(1) ● 友だちでできたよ(2)		
11月 全10時間	つかみややすくなったね ● おもてなすっぴん(1) ● 持ち物のさまり(1) ● 机の中もみんなにきれい(1) ● 4年教室ではどうかな？(1)	やさしい気持ちになれるね① ● ねんこすっぴん(1) ● ていねいな言い方(4) ● どんと頑張ろう(4)	友だちっていいね ● なかよく遊ぼう(3) ● 助け合い(3)
12月 全16時間	約束したよ ● お母さんとの約束(2) ● お父さんとの約束(2) ● 家のさまり(1)	やさしい気持ちになれるね② ● されしになったよ(2) ● 次の人も使えやす(3) ● 責任をもって仕事をしよう(5)	学校の行き帰り ● こんどき どうする？(1)
1月 全10時間	小さなお母さん ● 自分の部屋のそうじ(2) ● 身の回りの整理整頓(3) ● 机の中をたたき入れる(3) ● 食器運ぶがらさ(2)	地震・火事での避難のしかたについて ● 学校で(3) ● 家で(2)	
2月 全9時間	もうすぐ5年生① ● こんど、できよう！(1)	もうすぐ5年生② ● こんどやりたいな(10)	
3月 全15時間	6年生ありがとう ● 心に残る卒業しよう(10) ● できることは ないかな(5)		

エ 学習指導案・教材教具

児童の課題に応じた指導内容や指導方法、教材教具を考え、授業構成を何度も見直した。授業の中で、何をどのようにして、どこまでできればいいのか。どんな支援でできるようになるのか。見通しやゴール設定、効果的な支援等、試行錯誤する。自立活動の学習指導案として児童の実態やめあて、手立てを「個別の指導計画」と関連付けて、記入することについて工夫した。

自立活動学習指導案

1. 題材名 「やさしい気持ちになれるね」

2. 題材について

○児童観

本学級の児童は、4年生になり交友関係が広がり、休み時間に運動場に出て、友だちと活発に遊ぶことが多くなった。また、ジュニアバレーボールクラブに所属したことで、上級生とも仲良く行動する姿も見られる。交友関係が広がり良い反面、気がかりなこともある。例えば、相手を傷つけようと思って発した言葉でなくても、傷つけてしまった、傷つけてしまったことさえ気づかない場合も考えられる。また、本児童の場合、注意をしたり、間違いを指摘したりすると、親しい友だちや教師に対して、不機嫌な態度を示す時がある。

○教材観（設定の理由）

学校生活・社会生活において、よりよい人間関係を構築するためには、他者を意識した行動が重要である。相手を意識した「気持ちの良い挨拶」「ていねいな話し方」「相手に不快感を与えない聞き方」について本題材で学習し、「やさしい気持ちになれる」ためのスキルを身につけて、交友関係を更に深めさせたい。

○指導観

「やさしい気持ちになれるね」では、人とのかわりの中で、大切なきまりごとを正しく指導すること、どんなときに、どのように接したらいいのか、場を設定しながらスキルを身につけさせた。言葉遣いでは、相手に感じのいい印象を持ってもらえる言葉遣いができるように授業を組み立て、上手に言えたり、使えたりしているところではダイニングよく褒めていきたい。また、児童が意思表示をたくても、どうしても言葉が出ない時などは、うなずいたり、紙に書いたりして、相手に自分の気持ちを伝える方法があることを知らせる。

日常の生活を振り返る場を設定し、気持ちのいい挨拶や、ていねいな言い方、感じのいい聞き方の練習を積み重ねていけるようにする。

○自立活動の区分・項目

- 2 心理的な安定 (1) 情緒の安定に関すること。
- 3 人間関係の形成 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。

3. 児童の実態

気持ちが安定しているときは、にこにこことともいい表情で人と接することができる。しかし、気持ちが不安定になると、全く人の話を聞こうとしなかったり、暑くもなく寒くもないのに、衣服の脱ぎ着を何度も繰り返したりする等の行動が見られる。

4. 題材の目標

○身近な人との信頼関係を築き、周囲の人とのかわりを広げる。

5. 指導計画（全9時間）

- 第1次 あいさつっていいね・・・・・・・・・・1時間
- 第2次 ていねいな言い方・・・・・・・・・・4時間
- 第3次 どんな聞き方がいいかな？・・・・・・・・4時間

指導者○○ ○○

6. 学習の展開

(1) 目標

・ ていねいな言い方で話すことができる。

性別・学年	本時に関する実態	個別の目標	手立て
男女4年	「わからん」「知らん」といふ言い方が出てしまう。しかし、練習を重ねるごとに、少しずつことばのきまりや使い方について理解してきている。	丁寧な言い方ができる。	・自分の言い方を思い起こさせる。 ・上手に使えているところをおさえ、一つずつ増やせるようにしていく。

(2) 展開

学習活動	準備物	○手立て◎支援☆評価	B児の様子
1. はじまりの挨拶をする。			・姿勢のパターン化ができ、身に付いてきた。自然と足から手、背中など自分で気をつけている様子である。
2. 本時の活動を知る。	・スケジュールボード	○活動の見通しを持たせる。	
3. めあてを確認する。			
ていねいな言い方をしてみよう。			
4. 最近使った丁寧な言い方を考える。 ・発表する。 (発表ボードを活用して発表する。)	・カード ・発表ボード ・マジック	◎場面、場面で児童が思い起こすことができるようにヒントを出す。 ○必要に応じて、発表ボードに書くことができるように用意しておく。 ☆進んで取り組もうとしている。	・発表は、自信があるときと、ないときではかなり違ってくる。 ・発表ボードが自信につながり、立ち位置にきちんと立ち、大きな声で発表できるのではないかと思われる。
5. ていねいな言い方がたくさんあることに気づく。		◎進んで書くことができ、発表することができたことを称賛する。	
6. 次の予告を聞いておわりの挨拶をする。		☆丁寧な言い方は自分も、相手も優しい気持ちになることに気付くことができている。	

板書計画

ていねいな言い方をしてみよう

友だちに、ていねいな言い方をすると
日頃の司会

「……の人は手をあげてください。」

「ほかにありませんか。」

「すわってください。」

「……していただけますか。」

「……していただけますか。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

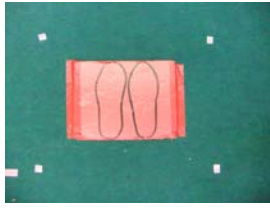
「ありがとうございます。」

目上の人と、友だちとは、言い方がちがいます。

自立活動の授業（全 19 時間）

児童の実態	自立活動の題材名・題材の目標	授業による児童の変容
<p>特定の親しい友だちと遊ぶことが多く、自分のことばで相手に気持ちを伝えることが苦手である。相手にどのように、どうやって気持ちを伝えたらいいのか困っている様子が見られる。人とのかかわり方が分からない児童に対してスキル学習を行ってきた。学習したことが生かせるように、場を設定して練習を重ねているが、なかなか身に付きにくい状態である。</p>	<p>題材の目標 ○場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できる。</p> <p>第 1 次 交歓会って？(1)</p> <p>第 2 次 交歓会の準備をしよう(2)</p> <p>第 3 次 自己紹介を考えよう(1)</p> <p>第 4 次 友だちできたよ(2)</p>	<p>初めての人や場所に慣れるまでに時間がかかる児童である。そのために、校外交歓会への参加に向けて事前に手立てをした。昨年の写真で様子を知らせたり、自己紹介の練習をしたり、行事の見通しを持たせた。その結果、初めてにもかかわらず交歓会では、自分から友だちを誘い、どんぐりを拾ったり、お弁当を食べたり楽しく過ごすことができた。</p>
<p>身の回りのことが最後までできるように、丁寧さや正確さについて練習中である。机の中の整理整頓等を何度も声かけされたり、苦手なことについて注意をされると、否定的な態度や顔の表情に変わることがある。また、持ち物にこだわり、使わないものでも身のまわりに置いておきたいという行動が見られる。床にどんどん物が置かれていく。かばんの中も使わないものをたくさん入れてきて、重い状態である。</p>	<p>題材の目標 ○基本的な生活習慣を身につけ、身の回りのことが自分でできる。(整理整頓)</p> <p>第 1 次 ふでばこすっきり(1)</p> <p>第 2 次 持ち物のきまり(1)</p> <p>第 3 次 机の中もこんなにきれい(1)</p> <p>第 4 次 4 年教室ではどうかな？(1)</p>	<p>ふでばこ手順カードの活用により、十回言っても、身に付かなかつたふでばこの中の整頓が、一回で身に付いた。</p> <p>持ち物では、必要でないものは大切に保管することを約束した。保管場所を決めることで安心して、気持ちを切り替えることができた。床に置いていた持ち物も机の横にかけるようになった。家庭でも、全ての持ち物を荷物に入れて、祖母の家に泊まりに行っていたが、今では、必要な物だけを持って行くようになり、その他のものはきちんと整理かごに保管している。自分でできたことに喜びを感じ、ほめられる回数も増えて、表情がよく、全体的に落ち着いてきた。</p>
<p>気持ちが安定している時は、にこにここととてもいい表情で人と接することができる。しかし、気持ちが不安定になると、人に会っても挨拶をせず、全く人の話を聞こうともしない。また、言葉不足のために、相手を不愉快にさせてしまうことがある。</p>	<p>題材の目標 ○身近な人との信頼関係を築き、周囲の人とのかかわりを広げる。</p> <p>第 1 次 あいさつっていいね(1)</p> <p>第 2 次 ていねいな言い方(4)</p> <p>第 3 次 どんな聞き方がいいかな？(4)</p>	<p>場面にあった挨拶の仕方がわからなかった。感じのいい話し方や言い方ができるように練習を重ねることで、丁寧な言い方ようになってきた。人とのかかわりでは、学年を問わず友だちとあそべるようになってきた。上級生には丁寧に話すということに戸惑っているようだが、学習したことをやってみようとしている。</p>

授業で活用した教材教具



足型シート



机の枠テープ

消しゴムのかすコーナー



短冊カード



発表ボード

検証前は、自立活動の授業の教材教具として、算数国語のワークシートを活用し、学習時間が余れば、児童の好きなぬりえを取り入れていた。

検証後は、児童の課題に沿って、教材教具を工夫し、整理整頓が苦手だった児童に「整理整頓の手順カード」を使ったり、見通しが持てるタイマーやスケジュールボードで行動の調整をしたりした。

- ・足型シート → 視覚的にも、触感的にも足を意識することができる。
- ・机の枠テープ → 机枠テープにより、児童が意識し、教科書やノートがはみ出さない。
- ・消しゴムのかすコーナー → 消しゴムのかすを、集めて捨てる。
- ・短冊カード → 板書を待つ時間が少ない。
- ・発表ボード → さっと書けて、さっと消すことができる。

担任は、日々の観察から児童には長い説明はあまり意味がないことに気付き、説明は、短く分かりやすく、児童の課題に応じた教材教具は視覚を重視して、見やすく、簡単に使えるものを作成するようになり、児童の課題に応じた教材教具が何なのか分かってきた。

(検証前)

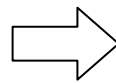
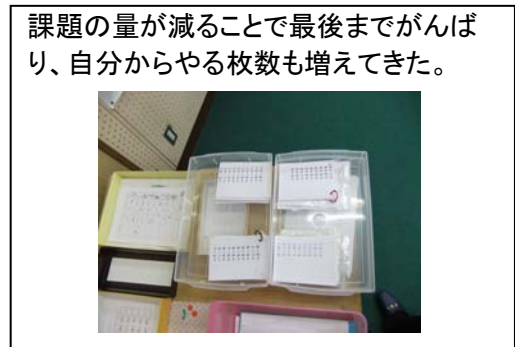
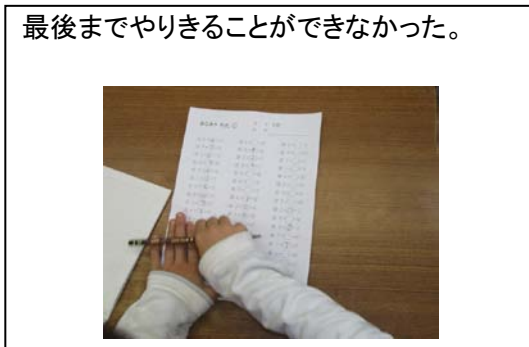
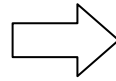
発表する際の、立ち位置はしっかり定着している。しかし、ここに立つまでに時間がかかる

(検証後)

発表ボードを見ることで、自信を持って、さっと立ち大きな声で発表できるようになった。

学習の準備や片付けに、丁寧さが見られない。

かごを活用することで机の中も整頓でき、出し入れが素早くなった。



オ 評価をする

授業後に児童が授業評価票に記入し、記述したものを担任が見て、次への授業の手掛かりとした。児童の目線での授業に対する思いや、教材教具の感想等が知ることができた。特にその時間に行えるようになったことに対する喜びが、多く記入されていた。

【表5 児童用授業評価票 記録例 参照】

表5 児童用授業評価票 記録例

内容	はい	いいえ
1. きょうの学習のめあては、分かりましたか？	(はい)	いいえ
2. 進んでふきだしに、書くことができましたか？	(はい)	いいえ
3. こまった時に、先生は声をかけてくれたり、助けてくれましたか？	(はい)	いいえ
4. ていねいな言い方をしてみよう、思いましたか？	(はい)	いいえ
5. やさしい気持ちになりましたか？	(はい)	いいえ

感想
よく算数のしつらいまはけと
しつらいまはけのことがおもしろ
い。

ちゃんタイムでできるようになったことがありますか？
このときからかきゅうごさいい
か、おもしろい。

授業中に先生の話を聞いていなくて、使われていないことが
ぼろぼろ聞いて、よく分かった。
先生の話を聞いて、よく分かった。先生の話を聞いて、よく分かった。
先生の話を聞いて、よく分かった。先生の話を聞いて、よく分かった。
先生の話を聞いて、よく分かった。先生の話を聞いて、よく分かった。

ふり返しカードに写真を入れることで、児童が場面を思い起こすことができ、有効であった。担任は、次の授業に役立つように記録し、児童に有効な指導方法や教材について、指導に関わる教員間に情報を伝えることができ年度を越えて共有できるものである。

【表6 ふり返しカード 記録例 参照】

表6 ふり返しカード 記録例

(児童)	(担任)
<p>1. 持ち物の整理</p>	<p>1. 持ち物の整理</p> <p>最後の中心回りで、なかなか約束が得られなかったが、このカードを通して進んで、自分以外の約束を思いまわってあげられ、物入れ(箱)を置いたことで約束が守られ、すっきりした場面となった。</p>
<p>2. かごをかけるのに気づいた</p>	<p>2. かごをかけるのに気づいた</p> <p>かごを置く、たまたま気づいた、とてもすっきり片付いた。このカードを貼ったおかげで、他のことにも応用できている。</p>
<p>3. 4年教室でほらかな</p>	<p>3. 4年教室でほらかな</p> <p>友だちの動きを見て、一生懸命練習している様子が見られる。集団の中での手立てを考え、場所が変わっても活用できる整理整頓についての工夫を伝えている。</p>
<p>4. はいとできるとに決めた</p>	<p>4. はいとできるとに決めた</p> <p>この授業後、朝のあいさつで整理、片付けたことが嬉し く話していた。自分から整理することを決めた。 特に、このおかげで、目、口、心で確認し、整理整頓 することができた。</p>
<p>5. いまからみんなの</p>	<p>5. いまからみんなの</p> <p>ていねいな言い方をしているが、普段の約束を 守れないことが多かった。このカードを通して整理、 片付けたことが嬉しかった。</p>

カ 担任の指導や児童の変容

検証後は、週5時間、毎日1校時目に自立活動の時間を位置づけた。

行動観察カードに記録することで、児童の気になる行動の理由や背景が見えてきた。気になる行動のパターンや時間、場所、環境、かかわり方が分かり、児童の課題が明確になった。

自立活動のチェック表の区分や項目を意識することで、児童の行動から課題が絞られた。

自立活動の指導計画では、見通しを持って授業の計画を立てることができ、児童の課題が自立活動の授業につながった。

自立活動の授業では、児童の課題に応じた授業ができるようになり課題に沿った教材教具の工夫ができた。授業の中で児童のつまずきを予想し、支援や手立てができるようになっていく。

評価では、支援や教材教具が有効であったかを見直し、改善ができ次時へのつながりや引継ぎを考えるようになった。

担任は、一つ一つの手順に沿って実践していくうちに「こういうことか」と気付き、意欲的に次の授業の指導案を立て、教材教具を準備した。児童の課題を考えて時間配分をすることで時間が余ったり、足りなくなったりせずスムーズに授業ができるようになった。

このような指導を受けた児童は、見通しを持って活動できるようになり、安心して授業に向かえるようになった。授業の流れの中で難しかったことが分かりだし、できなかったことが、一つ一つできるようになった。集中が難しくトイレに行ったり、落ち着きのない行動をとっていた児童が、最後まで課題に取り組めるようになった。ほめられることが増え意欲的に活動できるようになった。自立活動の授業づくりの手順のツールは、一つ一つに意味があり、全てが関わりあって、自立活動の授業づくりを導いている。

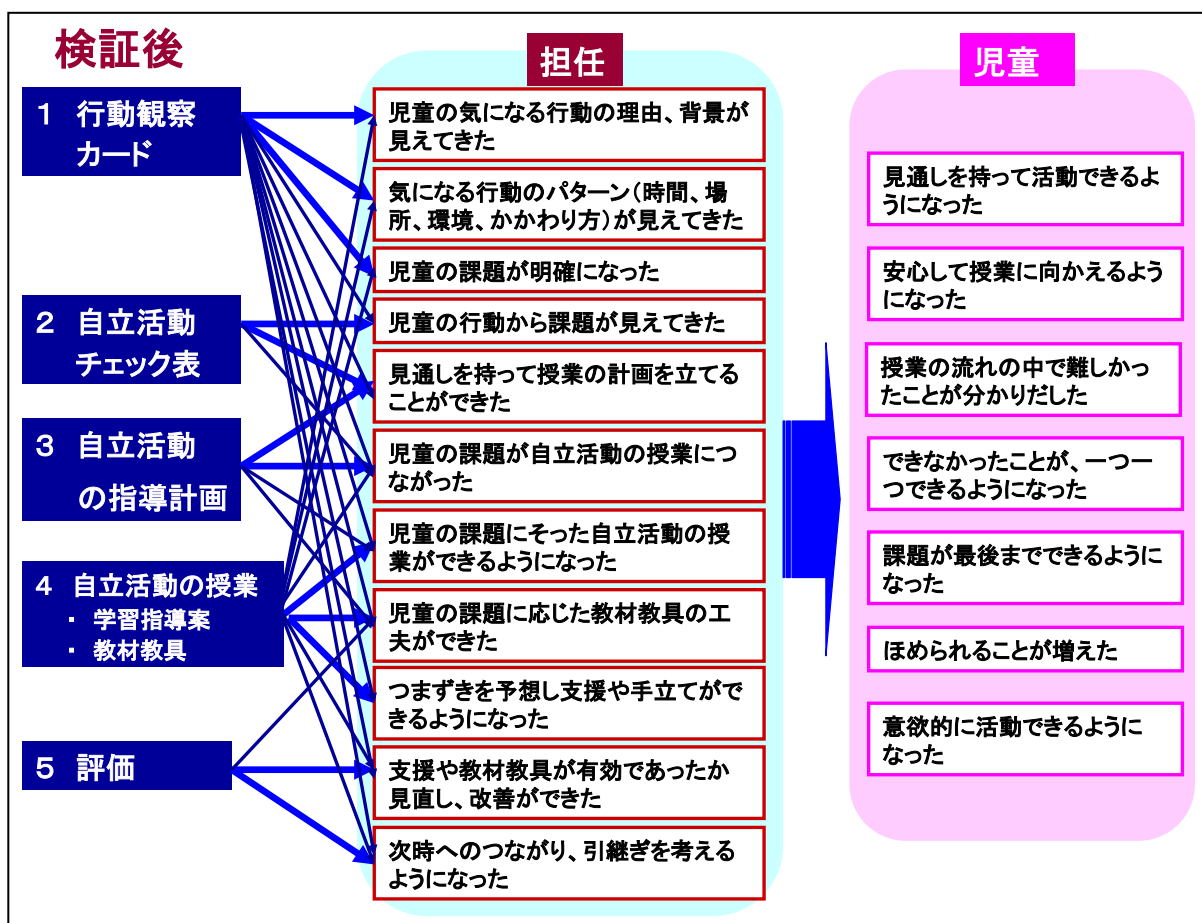


図1 ツールの活用

キ 保護者の変容

児童の変容が保護者の理解を深めることにつながった。保護者が特別支援教育についての理解を示し、学校で作った支援グッズや準備物を参考に家庭でも作成したり、購入したりするようになった。また、児童の課題を理解してからは児童へのかかわり方も変わってきた。保護者が学校での指導や支援が有効であることを理解し、担任との信頼関係がさらに深まっている。



保護者による手順カードの作成



学校で活用しているかご



家庭でも同じかごを購入

家庭でも整理整頓が苦手だった児童に、家族みんなが「こうすれば？ああすれば？」と声をかけていたが、児童を納得させることができなかった。しかし、学校での取組を知り、学校で使っている整理かごと同じものを購入し、学校と同じ手順カードを作成した。持ち物整とんカードを渡すと、児童は声をかけなくても自分で整理整頓をするようになった。また、洗濯機手順カードでは、手順に沿って一人で洗濯もできるようになった。

ク 学校体制の変容

特別支援学級の実践を、通常学級でも実践し成果を上げ、その取組が他の学級にも広がった。例えば、足型シートをヒントに色テープで実践した例である。今まで何度も声をかけ、注意をしてきたが効果がなかった。しかし、色テープを各自の足元に貼るだけで、児童たちは足元を意識しだした。シールで評価しながら、取り組む中で児童たちの姿勢が変わってきた。【写真2, 3, 4参照】

また、他学年でも一箇所に落ち着かない児童に、立ち位置をテープで囲むと、その場にきちんと立つことができ効果が見られた。学年をこえて取組が広がり、校内研修でも情報を共有するようになった。このように、特別支援教育の視点での取組から、同僚性が高くなり、学びを全体で共有し合え、児童支援における共通理解がさらに深まったと考える。



写真2 足型シート

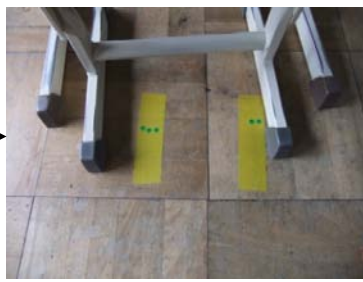


写真3 足位置色テープシート



写真4 声をかけなくても始まり終わりの姿勢ができる

4 研究成果と今後の課題

(1) ツールの成果と課題

	成果	課題
行動観察カード	<ul style="list-style-type: none"> ・集団指導の視点とは違って、個別指導での視点で実態把握ができるようになった。 ・実態や行動、障害の特性を理解した視点で観察が行えた。 ・行動を細やかに把握することで、児童の課題を見つけ、集団の中で自立活動の指導を計画することにつながった。 ・児童の学習や生活場面で、どのような困難が生じているのか、具体的な指導をした時に、何ができて、何ができていないかを見取ることができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害の特性を理解した行動の見方ができることが必要である。 ・児童とかかわる担任以外の教員や、保護者からの情報収集が大切である。 ・環境や場面、対応の仕方等、具体的に記録をとることに慣れる。 ・難しい課題の見取りについては、専門機関との連携をとり、的確な見取りができるような対応が必要である。
自立活動チェック表	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領自立活動編の、自立活動の「内容」を学習し、区分、項目を意識する機会となった。 ・児童の課題を学力向上と捉えていたが、児童の実態や行動を自立活動の区分や項目にあてはめることで、自立活動の課題が明確に見えてきた。 ・児童の課題は、必然性の高いものから取り組まなければならないことが理解できた。 ・課題を克服させるために指導計画が必要であることの理解につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が、生きてくために今何を身に付けなければならないのかを考慮し、課題を設定する。 ・多くの課題から、優先順位をつけていくことが必要である。
自立活動の指導計画	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の課題に応じて計画し題材を選ぶことによって児童にとって学びやすい状態を作ることにつながった。 ・見通しをもって授業の計画を立てることができた。 ・自立活動の指導計画を立てる中で、年間を見通した年間指導計画が必要であると気付き作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態に合ったゴールを設定し、指導計画を立てることが大切である。 ・指導計画をPDCAサイクルによって、見直し、実態に即した実践をする必要がある。
自立活動の授業	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の課題に応じた指導内容や指導方法で特性に応じた教材教具が設定された授業が行われると、児童の表情や態度、言葉づかい等の変容が実感できた。 ・保護者が、できることが多くなった児童を見て、家庭でも支援グッズを作成し、活用するようになった。 ・児童の変容が見られる授業を展開することで、指導者が達成感を得、授業づくりに意欲的に取り組めた。自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している児童には、何らかの課題がある。そのため日々の指導においては、的確な見取りや授業を仕組み、課題解決の保障をしていくことが責務であると気付くことができた。 ・課題にそった授業づくりは、通常学級でも有効な支援や指導方法であると情報共有でき、他学年の指導者も実践できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自立活動の授業においては、教科書や指導書がないので、児童の課題に応じた授業づくりがなされなければ、達成感や変容は見られない。このことは、児童の将来の自立と社会参加につながる。 ・自閉症・情緒障害特別支援学級の自立活動の授業を公開することで、通常学級での特別支援教育の視点や実践を広げていくことが必要とされる。

(2) 研究の成果と今後の課題

担任が、手順に沿って児童の課題に応じた支援や指導方法を考え、授業を実践することで、児童が、成功感や達成感を味わうことができた。このことが自立活動の授業の充実であると考えられる。児童の障害の特性から行動の背景を見取ることができるようになり、専門性も高まってきた。担任の実践を見て、通常学級の担任も児童理解について支援の視点で観察し、実践するようになった。児童が、自立活動の授業で学習し、身に付けたスキルを、自信を持って日常生活の中で応用することができるようになってきた。

研究を通して、自立活動の授業の充実、指導者の専門性、児童の自立する力の保障の三つが関わりあい、高め合っていると見える。

研究の課題としては、この研究が有効であるのか学校現場に帰り確かめていくことや、校区の小中学校や市教研で、授業公開し、情報交換しながら自立活動の教材研究や授業研究の情報を集め事例を増やしていくことである。また、保育所、小学校、中学校、高等学校において、校種間で、就学や進学に際して、それまでに積み上げてきた指導や支援を情報共有しながら連携していきたいと考える。

研究する中で、成果物として「自立活動応援ナビ」を作成した。自閉症・情緒障害特別支援学級の担任が、自立活動の授業で個々の課題に応じた指導が難しいという実態があることから、自立活動授業づくりの手順や、行動観察カード・自立活動チェック表・自立活動の指導計画表・学習指導案と教材教具のツール、参考資料には、手順表・カード・遊びのルール・個別の指導計画とその記入例等を掲載している。自閉症・情緒障害特別支援学級に入級している児童生徒の実態や、実態からみられる課題は様々で、全ての実態に応じた手順・教材教具を示すことは難しいが、これを一つの手掛かりにして、担任がそれぞれの児童生徒の課題に応じた授業になるように応用したり、工夫したりすることで、有効に活用できるのではないかとと思われる。

児童生徒の課題把握を的確にすることが、自立活動の授業の成功につながると実感した。また、自閉症・情緒障害特別支援学級では、知的に遅れのない児童生徒が、障害特性や情緒に課題があり入級している。その個々の課題に応じた保障や学力保障を日々の授業で実践することが、児童生徒の将来に大きく関わってくる。児童生徒の進路を保障するためにも、特に小学校の六年間は大きく、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童生徒の進路がどうなっているのかを正しく理解して、学級経営していく責任の重さを感じている。

【参考・引用文献】

- ・ 笹森洋樹・廣瀬由美子・三苫由紀雄『新教育課程における発達障害のある子どもの自立活動の指導』明治図書、2009
- ・ 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育の基礎・基本』ジヤース教育新社、2009
- ・ 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「就学指導資料（補遺）」平成18年7月
- ・ 発達障害情報センター『災害時の発達障害児・者支援について』
- ・ 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』平成21年6月
- ・ 国立特別支援教育総合研究所 自閉症スペクトラム障害のある児童生徒に対する効果的な指導内容・指導方法に関する実際的な研究—小・中学校における特別支援学級を中心に—研究成果報告書
- ・ 千葉県総合教育センター「ガイドブック通常学級における特別な教育的ニーズのある子どもへの支援」
- ・ 宮城県特別支援教育センター「平成21年度特別支援教育長期研修員報告書」
- ・ 高知県教育センター「特別支援学級担任通級による指導担当教員のためのサポートブック」平成23年4月